

Title	<書評>コミュニケーション過程と境界
Author(s)	大津, 陽子
Citation	京都社会学年報 : KJS = Kyoto journal of sociology (1995), 3: 127-133
Issue Date	1995-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/192513
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

<書評>

コミュニケーション過程と境界

Elizabeth C. Fine and Jean Haskell Speer (eds.),
Performance, Culture, and Identity.
 (Praeger Publishers, 1992)

大津陽子

1 パフォーマンス研究の起源と方法

本書はPerformance Studies Division of the Speech Communication Associationのメンバー達によってかかれた二冊目の本である。最初の本の主題は伝統的な西洋文学に集中していた。この二冊目の本は非西洋世界と西洋世界の両方での、文字によらない口述の民俗パフォーマンスを研究対象にしている。そして制度としてではない、身体性に結びついた美の問題ということも考慮に入れている。このことは社会学において美の問題を考えるととき有効な視点を示しているだろう。

このパフォーマンス研究はかなり学際的な起源をもっており、コミュニケーション論、民俗学、言語学、人類学、文学批評、演劇学、哲学そして社会学とその出自はじつにさまざまである。

本書執筆の中心はアメリカのコミュニケーション研究をする民俗学者達である。その間で、1970年代から80年代にかけてとくに新しい傾向がでてきた。それはパークやゴフマン、ベイトソン、ハイムズなどの影響ででてきた、劇場のメタファーや行為の象徴的構造的分析、エスノグラフィーの手法などをつかった研究である。そのことによって民俗伝承（フォークロア）を、ダイナミックなコミュニケーションの過程として定義するようになった。そして会話の（口述伝承の）分析から、より広義のパフォーマンス研究へとシフトをはたしたのである。つまり、この研究は「何を話すか」という内容だけでなく、「どう話すか」という過程、美的側面を対象にするようになったのである。この論文集も基本的にこの立場によって貫かれている。

また彼らが話したり、演技したりするさいの美的な側面に注目するのは、それに単なる

知覚とは違うものを通じて、我々を「他者」へとつなぐ意味があるのだと考えているからである。

2 本書の目的

本書の題名である、文化とパフォーマンス、アイデンティティはどう結びつくのか。彼らはアイデンティティを形成するパフォーマンスの力に注目することで、その答えを探していこうとする。それはどのようなものなのか。答えは複雑で弁証法的であるが、まずひとつには「真似すること」にその答えがある。たとえばクリント・イーストウッドがタフでマッチョな刑事を演じ、マドンナが情熱的なヴァンプを演じる。そのイメージは極端にステレオタイプであるけれども、それらは人々が行動のモデルを見いだす古典的な役なのである。このように、真似すべき他者のモデルを形成することを通してパフォーマンスは文化的アイデンティティを形成する。

しかしパフォーマンスは単なる真似にとどまらず、「発明」をも含んでいる。パフォーマンスは知り、学ぶための手段なのである。アリストテレスは詩人や作者は自然の真似をするだけでなく、制作することで世界のパターンを明らかにすることによって、自然に「改良」をくわえているのだといっている。演じるとき、必ずその対象についての細かい観察を通して新しいことを学習する。つまりここでパフォーマンスはアリストテレスの意味でのポイエティック¹⁾になりうるのである。パフォーマンスを通じてアイデンティティは常に改変されていく。

R・バウマンはすべての本質的な社会的相互作用はアイデンティティの構築とアイデンティティ間の交渉についてであるという。そのような相互作用のなかでとくに語りのパフォーマンスは、個人の社会的イメージを構築するための、自身についての情報をコード化し、提示する手段なのである。ひとりのアイデンティティが個人と社会との対話のなかで発達するとき、パフォーマンスはゴフマンのいう意味での「自己提示」、繰り返されることによって本質的なものになる。繰り返されて、それが一定の形式をもつようになったパフォーマンスは、個人や共同体の「物語り」となり、アイデンティティをしめす指標になる。

¹⁾ ギリシア語の *poiein* (創造する、発明する、産出する)から。詳しくは、Certeau, 1990=邦訳, 1987 参照のこと。

3 本書の概要

すべての章はパフォーマンス研究で活躍するコミュニケーション学者によってかかれたものである。この分野の多岐的な、折衷的な性質を反映して、対象とする場や方法は様々である。しかし共通の関心としてパフォーマンスがどのようにして個人の、そして集団の文化的なアイデンティティーを明らかにし、かたちづくり、ときには変えてきたのかを探究するという視点をもっている。

本書の特徴である可変性、多様性を尊重するため細かく分類することは避けなければならない。しかし編者も言うようにあえて11の論文は大きく3つに分けることができよう。すなわち、儀礼、場所の感覚、女性である。これらはすべて「境界」が、キーワードになっている。この「境界」を時間的空間的想像的に越えることが問題なのである。基本的にこれに添いながらいくつかの論文を挙げ、順次説明を加えていく。

3-①儀礼と場所の感覚

儀礼を中心としたものは最初の2論文である。もちろん両者ともアイデンティティーを形成する共同体の物語りである儀礼に注目しつつ、場所の周縁性境界性、社会の周縁に生きる人間もテーマにしている。そのひとつこの本の編者でもあるFineは黒人教会の説教によってなされた伝統的な儀礼の過程を分析している。具体的には1973年にカリフォルニアのオークランドで行なわれた、大きな教会での説教で、「この難破した時代にたいしてキリストは答である」という題がついている。牧師のhigh talk（熱狂したときの歌うような声）をふくむ巧みな話術に導かれて、聴衆のあいだから自然発生的に返事や歌が沸き起こる。「聖霊にとりつか」れ、恍惚とトランス状態に入る信者もでるので、説教中は白い制服を着た何人かの女性たちが看護のために待機するほどである。このような熱狂は儀礼をテーマにしている論文すべてに見られる。

FineはV. ターナーの儀礼に関する理論をもちいて、この説教の遂行的（パフォーマンス的）メタファーがオーディエンスをどのようにコムニタスの儀礼的状态に運ぶのか、をしめしている。コムニタスとは反社会構造、もしくはあらゆる集団、状況、環境で自発的に沸き上がる、アイデンティティー間の、充滿した直接的なコミュニケーションや霊的とまでいえる交感の関係のことである。この充滿した完全な交感はリミナリティから延長してくるものである。リミナリティは説教では垂直的に下（down）、水平では外側（out）の空間のメタファーであらわされる。その反対に、牧師の歌（high talk）は、上（up）で内側（in）のイメージであらわされる。このメタファーは教団を自発的でエネルギーに満ち

たよびかけや返事で特徴づけられる、コムニタスの状態へと導く。

3-② 語ることの機能

次にパフォーマンスによって動かされるオーディエンスのみならず、どのように演じるかという問題、演技する側の問題について触れてみたい。もちろん、前章でオーディエンスはただ動かされる存在ではなかった。それは、返事や歌が自然発生的に起こって初めてコミュニケーションが完全なものになることから明らかである。しかし、何が伝えられるかよりどう伝えるかという美的側面が問題となる場合、やはりもっと演技する側に焦点を当てる必要があるだろう。そしてこのことはパフォーマンス研究が一時の流行ではなく、身体的、美的コミュニケーションの意味を考える手がかりとなっていくことを示唆している。

たとえば第5章の "That Black Fall": Farm Crisis Narratives では1985年にアイオワ州とミズーリ州で farm crisis を体験した人物たちへのインタビューを行なっている。農家はアメリカの社会のなかでもある文化を形成している。独立独歩の姿勢である。

しかし危機のなかで、農家の人々は自らの苦しみを他者に語りはじめる。筆者の Carlin はそこで語りの美的側面と、危機にある話し手にとっての語りの機能との関係に焦点を当てている。Carlin は細かく会話の技術を分類して分析する。そこで明らかになる語ることの機能とは、癒しとしての機能である。語り手は自らの内面を見つめ、失敗がなんであったのかを理解しようとする。そして仲間の農家にも、その原因を知らせようとする。そこで物語られるのは、個人のものでなく、ある意味での集団的な「我々の」物語なのである。語ることによって問題や恐れ、悲しみをわけあうオーディエンスをえる。

物語ることは、説得行為にもなる。その意味で用語の選択や話す際のふるまい方が、修辭的にも美的なコミュニケーションを導きだす。そして、問題はアメリカ中西部の農場という周縁だけにとどまらず、我々に声となってじかに語りかけてくる力をもつのである。

3-③ 女性（社会の周縁）

第8章では、ことばにとどまらない、新しい分野のコミュニケーションの可能性について示唆している。それは、亡命した Homong の女性たちの刺繍作品である。伝統的には儀礼に結びついた、蝶や花の刺繍が、亡命という体験を経たのち物語刺繍 (story cloths) と呼ばれるものを生み出した。ここでの物語とはとくに彼らの脱出、故郷からの追放の物語である。西洋の歴史家が西洋の視点から歴史を創造するより前に、物語刺繍は、追放された登場人物たちとして演ずることにより自らを同一化し、追放の経験を証明し、自らの歴

史（物語）を語る文化的な空間を提供している。

また、筆者のConquergoodは文化的アイデンティティーというものは安定した、所与のものではなく、くりかえし演じられる「過程」であると結論を下している。それはたとえば布に母国語でない英語の文字を刺繍したり、彼らの美的感覚では色鮮やかなものが好まれるのであるが、顧客であるアメリカ中間階層の好みの渋目の色を取り入れたり、そうしながらも布に自分たちの物語を綴っていくかれらの姿からもうかがえる。彼らは支配的な文化のなかでその文化に自分たちのために小さな変化を加え続けている。この小さな変化のうちで彼らのアイデンティティーもまた変化を遂げているのである。

もし、我々がアイデンティティーを巡視すべき境界線ではなく、交差点、交換の場と考え直すのであれば、亡命者とその国に生まれた人間とを隔てている距離は消失すると筆者は言う。一方でこのHomongの政治的な意味をもちうるアートが、アメリカ人の手によりフォーク・アートとして分類されるとき、意味と力を骨抜きにされてしまうという鋭い分析も見せている。しかし、このような「オリエンタリズム」を乗り越えるのもまた、パフォーマンスの力である。それは、外国のメディア、シンボル、言語に接近しつつ、過去を拾い集める存在の証明を通じて可能である。また、所与のものではない、ばらばらの破片のなかの存在、過程としてのアイデンティティーを認めあう道程のなかではじまる。

この本の最後の4つの論文は語り手としての女性に焦点を当てている。とくに第6章では語るという行動についての、規範的な前提を理論的に崩すことに挑戦している。そこで筆者のLangellierとPetersonは主流から排斥された集団の物語りについて考えるものにとって、刺激的な理論、語彙、方法論を提供している。その語彙をいくつか挙げてみよう。たとえば、題名にもなっているspinstorying。この通り、以下、「つむぎ」の比喻で女性の会話の特徴を表している。女性の語る行為を支配する核となる話（kernel story）は、個人的な語りや集団のつながりを「つむぎ」だし女性の人生を「編み」こむ曲線的（curvilinear）な構造のなかで、会話から物語、会話から物語へと急旋回（spiral）しているのである。

この研究は新しい概念のフレームワークを提出している。そして、男性のヘゲモニーに支配されてきた研究に代わる、語りの型と語りの戦略を提供している。このspinstoryingから現われてくるのは個別化し、見下した評価をし、規律化し、女性のアイデンティティーを沈黙させる、男性の支配するディスコースに挑戦する集団のアイデンティティーと集団の連帯であると彼らは結論づける。

ただしここでは注意が必要である。ひとつには、男性の語りー女性の語りという二項対立図式を出発点とすると、どうしても語りの生成する過程に注目する筆者らの意図と関係なく、結局は単に二項対立図式の提示でおわってしまうという問題があり、また、「女性

の」(women'sではなくwomenと断ってはあるが)という言葉を使う場合にともすればエッセンシャルリズム⁽²⁾に陥ってしまう可能性があるからである。

4 まとめ、その他の問題

ここで、もういちどこの本で問題になっている事柄を取りあげておきたい。まず第一に、文化的アイデンティティーに対する場(時間、空間)の感覚の影響と、場の分裂や追放の問題を処理するパフォーマンスの役割である。パフォーマンスは文化的背景を想像的に再構築し、ことばや身振りなどを通して身体的物質的な場を取り戻す方法を提示する。

またほとんどの章が文化の政治学とパフォーマンスを理解するときの文化的ヘゲモニーの役割を意識したうえで成り立っている。ある特別な集団や制度(男性やヨーロッパ人、資本主義など)のヘゲモニー、もしくは支配は、概念と解釈を無意識的な習慣にしていく。研究者は聞くことに対する話すこと、集団に対する個人、文脈の前後関係に対するテキスト、参加者に対する研究者などに価値をおく学問的な指向、その政治的ヘゲモニーを問わなくてはならない。

パフォーマンスにおける伝統の継続と伝統の発明との弁証法も問題となった。伝統はイデオロギーによって創造され取り決められ影響を受ける。そして、連続する再解釈と変化に従属する。パフォーマンス研究はパフォーマンスがあるひとつの社会的状況から引き離されべつの社会的状況のなかで演じられるとき、文脈のなかに取り込み、再びそれを文脈に投入する過程を明らかに示している。

また、筆者たちはパフォーマンスに要求されるモラルの側面を確認している。そこでは、ある目的が示される。癒し、現実と死とを受け入れる方法としての、パフォーマンスである。

S・フェルマンがユダヤ人虐殺に関する証言を集めた映画『ショーア』について論じていることであるが、「証言すること」とは「語ること」と異なると断りつつ、それは歴史にたいして、ある出来事の真実にたいしてそして普遍的(非個人的)な妥当性と帰結をもつことによって定義上個人を越えているようなことからたいして——語ることに——責任を負うことなのである⁽³⁾といている。このとき映画という一見モラルを離れ

⁽²⁾ 本質主義と訳される。ここではとくにフェミニズムの文脈において使用されるように、女性と男性の社会的関係を「男女という性別」の「本質」に還元するような思想傾向を意味する。江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』勁草書房, p.36-37参照。

⁽³⁾ Felman, 1990, p.56=邦訳, 1995, p.104

その内部において止揚すると思われる芸術は、現実にはたいしてどんな力をもつというのだろうか。真実は芸術の可能性を止めることはない。それどころか真実は芸術に、自らが証人としての我々のうちに伝達されて深々と入りこむことによって、我々自身を証人へしたてあげることを要求する⁽⁴⁾。

5 終わりに

この論文集は、美的なことばによるパフォーマンスは認識論的な問題であり、自己、文化そして他者をよりよく知るための方法であるという前提のもとにかかれている。そしてパフォーマンスによって我々がおたがいにより深くアイデンティティを獲得して、共鳴することを「願っている」としている。多少楽観的すぎるくらいはある。しかしこの研究の特徴にその理由を探ることができる。それは目的でなく、過程に注目することである。そのために個々の論文それぞれがエスノグラフィーの手法を取り入れたりしながら、繊細な表現方法をもっている。これらのテキスト自身がまたひとつの作品（アート）としてわれわれにひらかれている。それゆえときとして、ばらばらな印象を得ることもあるだろうが、このようなとまどいも、作者、読者のコミュニケーション過程だととらえることもできる。そのときに我々のなかの境界をひとつ越えることができるであろう。

引用・参考文献

- Certeau, Michel de, 1990, *L'invention du quotidien, L'arts de faire*, Gallimard (=1987, 山田登世子訳, 『日常実践のポイエティック』国文社)
- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』, 勁草書房
- Felman, Shoshana, 1990, *A l'âge du témoignage: SHOAH de Claude Lanzmann*, Belin (=1995, 崎山正毅・細見和之訳, 『声の回帰』, 『批評空間』, 4号, 太田出版)
- フェルマン, S., 1991, 立川健二訳, 『語る身体のスキャンダル』, 勁草書房
- ターナー, V.W., 1976, 富倉光雄訳, 『儀礼の過程』, 思索社
- Turner, V., 1982, *From ritual to theatre*, PAJ Publications

(おおつ ようこ・修士課程)

⁽⁴⁾ ibid. p.57